

## 近畿ブロック国際理解教育研究大会 大阪大会 シンポジウム 報告

### 「多文化共生社会を主体的に生き抜く子どもたちを育てるためのしかけづくり」



シンポジスト	善元幸夫さん（東京都新宿区立大久保小学校教諭：左から二人目） 清水隆史さん（堺市立少林寺小学校校長：左から三人目） リリアン・テルミ・ハタノさん（甲南女子大学准教授：右から二人目） 石川ミリアンさん（外国籍保護者・日系ブラジル人：一番右）
コーディネーター	榎井 縁さん（とよなか国際交流協会事業課長：一番左）
記 録	高橋 誠（大阪市立横堤中学校）

#### 1. コーディネーターより

- ・これまでに1万人以上の海外赴任をした教員がいる。その経験が活かされていない要因として、日本の学校現場が忙しすぎることで、日本の社会が既に多文化性をもっていることが不可視化（見えにくくなっている）という現状があるのではないかと？
- ・それぞれの子どもの違いが、違いとして認められるべきである。在日外国人教育、人権教育の基礎のある大阪で今回のシンポジウムが持たれた意義がある。

#### 2. 各シンポジストからの自己紹介を兼ねた取り組みの紹介

##### <善元幸夫さん>

- ・新宿は人口30万人の中に、140カ国の人々が在住している。そして人口の10%にあたる約3万人の外国籍の人々が暮らしている。
- ・15年前にも問題意識はあったが、そうした外国の人々に「日本語をどう教えるのか」を考えていた。しかし、今、振り返ってみると、子どもの視点（学習者の視点）が不足していたと思う。
- ・ある中国から引き揚げてきた家族の男の子は、いつも「バカヤロー」「殺すぞ」と言っていた。それは中国人にも日本人とも言えない存在ゆえに、まわりからいじめられたりすることもあり、やられる前にそうした言葉を発することで自らを守り、生き抜こうとしていたと思う。
- ・外国から来る子どもにとって日本人とどういう関係を作るかは大切なことであるが、日本人の子どもにとっても外国から来た子どもとどういう関係を作っていくか考えていくことが求められている。そうしたいきさつからニューカマーの日本語教育を考えるようになった。すなわち、それまでの「ことばを覚える」ことを中心とする学習から、子どもの文化を大切に学習を考えるようになった。
- ・今、彼らの自尊感情をどう育てていくのかということを考えている。乗り越えるべき壁は「ことばの壁」だけでなく「マイノリティへの差別の壁」である。

##### <清水隆史さん>

- ・堺市立少林寺小学校は、約650年前に朝鮮通信使が宿泊した場所が地域にあり、校内に民族学級を持っており在日外国人教育を推進してきた。
- ・かつて、ある保護者から民族学級に子どもを入れるとは「在日」であることを公にすることであるという指摘を受けた。それは子どもたちが差別を受けているという現状への問いかけでもあった。
- ・現在本校では民族学級をさらに発展させ、日本人の子どもが韓国・朝鮮の文化を学ぶ「トラジ学級」を作っ

た。総合の時間などを使い、ハンゲルやあいさつ、音楽などを学んでいる。日本の子どもたちが在日外国人とその文化を受け止めるということは、外国人の子どものアイデンティティーをどう受け止め、日本の子どもにも多文化理解の考え方をどう広めるのかということである。

- ・ 2005年～2008年までマレーシアのパナン日本人学校に校長として赴任したが、マレーシアでは中国系、イスラム系、ヒンズー系の他民族が共生し、それを国の方針としていることに驚いた。特に少数で生きている人々が大切にされていることを感じた。

### <リリアンさん>

- ・ 自分の名前をあえてカタカナで書くことにしているのは、まわりの人々に違和感を与えて、何かを感じ取り、考えてもらうきっかけにして欲しいと考えているからである。
- ・ 豊中との出会いは、「居場所メイト」の取り組みだった。それは、それまで壁側にしか居場所がなかった人々が、堂々と真ん中に座れるようになることを目指した取り組みだった。
- ・ その後「子どもクラブたんぽぽ」というグループを作って活動をしたが、それはたんぽぽのようにいつか、自分の居場所に飛んでいけるようになることを願って名付けたものだった。初めは日本の学校に直接働きかけようとしたが、なかなか難しく、今は学校の外の活動ではあるが、草津で地域の人々が使える場所を見つけ取り組んでいる。学校は少なくともポルトガル語を教える取り組みを認めてほしい。
- ・ 今の日本社会に危機感を持っている。バブル期には約30万人のブラジル人を労働力として日本に集めたが、現在の不況でその30万人のブラジル人を切り捨てようとしている。たまたま生活の糧を得られる場所が日本であったからやってきただけのことであり、どの親も自分の子どものために生き抜こうとしている。その思いを理解しているのだろうか。
- ・ 今の日本の社会のままならば、今後日本に魅力を持って外国人がやって来るのかは疑問である。世界には約300万人のブラジル人がいる。アメリカには150万人、日本には30万人がいるが、アメリカではブラジル人学校は作らない。しかし日本では83校のブラジル人学校がある。それは何故か？それは日本の学校がブラジル人を吸収できていないからである。ブラジル人がゲッター化することが理想ではない。在日ブラジル人との接点を作るのが日本の教員の仕事ではないか？
- ・ 子どもたちが自分の名前に誇りを持って、自信を取り戻すことから始めていきたい。

### <石川ミリアンさん>

- ・ 1995年にブラジルから出稼ぎで日本に来た。
- ・ 来日当初は一日中母国語で暮らすこともできて不自由は感じなかった。しかし子どもができるよう、学校や病院で日本語が必要になってきた。
- ・ 日本の学校に入学するとき校長先生から「差別は絶対無い」と言われたが、息子が小1の時にまわりの子から「ET」と呼ばれるという差別を受け、毎日泣いて帰ってきた。また、学校からのプリント類がほとんど理解できず、カタカナやひらがなで書いてもらうことにした。その時、日本人の母親たちがいろんな面で協力してくれた。
- ・ 現在、とよなか国際交流センターと関わり、外国籍の母親たちと交流を始めた。自国の文化について地域や学校で話す取り組みをしている。日本の学校がどういうところなのか分かってきたが、英語圏以外の文化も知ることが大切だと思う。子どもたちも英語圏以外文化の体験ができることをよこんでいると思う。

### 3. コーディネーターからのまとめ

- ・ 現在の日本の社会(学校)が特別なものになっている。学校はもっと多文化性に追いつく取り組みを行う必要がある。
- ・ 豊中での取り組みも、以前は英語のみの交流を行っていた。しかしここ3～4年で中国語、韓国語、ポルトガル語、スペイン語を共に学ぶ取り組みを進めており、外国籍の子どもだけでなく母親たちも元気になってきている。
- ・ 外国人の直面している問題の多くは、日本人と日本社会の問題でもある。
- ・ 「考えても何もしないのは、何もしないのと同じである」ということばがある。ぜひ実践をしていこう。

